

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なお往生す、いかにいわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむころかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなるることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも往生の正因なり。よって善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそうらいき。

第三章 「善人なおもて往生をとぐ」

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

第三章は「悪人工機」を表す一段として有名ですが、先達は、本章の主題は「往生」であるといわれています。第二章では、宗祖の言葉を通して、「浄土真宗とは往生極楽によって仏となることを内容とする仏道である」ことが確かめられました。それを受けて第三章では、「善人・悪人」という視点を通して往生の内容が吟味されています。

文中、善人とは向上の夢を追い求めて自身の分限を見失っているあり方（自力作善のひと）を指し、悪人とは罪悪の自覚に生きる者（煩惱具足のわれら）であると押さえられています。

対して、「世の人」の説として取り上げられている善人・悪人は、人格の優劣や人間性の有無など、世間的通念に基づいての了解でしょう。この二つの見方が単純な対応関係ではないということが第三章を読むときに混乱を生じさせている一因だと思われます。

だからと言って「この二つは善人・悪人の見解についての土台そのものが違う」と言って無規することはできません。なぜなら『後序』に「一室の行者のなかに、信心ことなることなからんがために」と言われているように、『歎異

抄』は念仏の教えを頂きながら、いつも世間的な善悪の価値観に執らわれて生きていた私たちの生き様が問題にされているからです。第三章においても、往生の吟味としての善人・悪人と、世の人の見解とは自力の迷執という質において通底しているのであり、そこに歎異されるべき現実があるのです。

言い換えれば、本章では、善人・悪人という言葉を通して、私たちの信心が「自力の信か、他力の信か」ということが問われているのです。教えを聞きながら自力の信に基づく自らの善人性が払拭できない限り、そこに実現するのは方便化土の往生なのです。

方便化土は「疑城胎宮・辺地懈慢」と表されるように、教えに遇って喜びを感じながら、なお仏智の不思議を疑う心がぬぐい切れないあり方です。自分の努力を誇り、出遇ったものを握りしめている世界が方便化土です。

しかし、また、方便化土は「偽りを知らせて真実に導かんとする大悲の世界」とも言われます。自らを化土に止めている自身の限りない善人性を知らされ、「自力のころをひるがえして地力をたのむ」ところに、真実報土の扉が開かれるというのが本願の論理です。

自らの歩みを通してその本願の確かさを証明されたのが宗祖です。和田稔先生は、宗祖の時代における善人とは知識・教養・権力・財力・地位などを待ち、それを頼みに生きている人であり、その人は本当に頼むものが分からない自力の人であると指摘されます。悪人とは獵師・商人に代表される「いし・かわら・つぶて」のごとき頼みにするものが全くない人であり、それ故にもっとも確実なものを頼む、すなわち「他力をたのみたてまつる悪人」だと言われます。

越後や関東におけるそういう人々との出会いによって、宗祖は自らの課題を突きつけられたのでしょう。「善し悪しの文字をも知らぬゆえに真の心で生きている人」から「善悪の字知り顔において大虚言で生きている」宗祖自身が歎異されるものとして浮き彫りにされたのではないのでしょうか。そういう出会いを通して自分自身がどこまでも歎異されるものとしての方向を見失わずに生きていく、それが宗祖にとっての方便化土を離れた相であり、その自分が歎異される根拠として真実報土を仰いでいかれたのでしょう。

「善人・悪人」の問題を往生の条件として是非するのではなく、「他力をたのむ」ことが本願他力の意趣であるということを見失ってはならないことを教えられます。